

Title	社会学における文化概念 : グローバル文化論のために
Author(s)	丸山, 哲央
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49462
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	丸山 哲 央
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 22572 号
学位授与年月日	平成20年12月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	社会学における文化概念—グローバル文化論のために
論文審査委員	(主査) 教授 厚東 洋輔 (副査) 教授 友枝 敏雄 准教授 辻 大介

論文内容の要旨

社会学においては、「文化」が専門用語として確立される以前から、人間生活の象徴的側面と象徴内容の自律性に焦点をあてた観念、知識、シンボル等の「文化的なもの (the cultural)」は理論構成上重要な位置づけを与えられてきた。M. ウェーバーにおける近代のエートスの分析と観念による行為の方向づけという発想、É. デュルケムにおける宗教的シンボリズムと集合意識という概念 — これらはすべて「文化的なもの」を理論化するための装置に他ならない。社会学が人間生活における共同性の解明、つまり社会的相互行為からなる社会関係の本質 (「社会的なもの (the social)」) を探究する学問とするならば、価値、信念、信仰、イデオロギー、エートスといった人間の行為と不可分の象徴的要因の分析を避けて通ることはできない。しかし、19世紀から20世紀初頭にいたる古典的な社会学の諸理論においては、「社会的なもの」が分析対象の中心をなしており、「文化」が明確な概念規定のもとに専門用語として用いられてきたとはいえない。

20世紀中期 (1950, 60年代) に至って、米国の社会学者であるT. パーソンズは、それまでの社会学の諸理論において用いられてきた「文化的なもの」を、心理学や人類学との学際的な研究成果と統合する中で、社会学の文脈における文化の概念規定とその包括的かつ論理整合的な分析図式を提示した。パーソンズの社会学理論における文化概念ないしは文化の分析図式の特色は、社会 (集合体) やパーソナリティ (個人) と記号の体系としての文化とを区別したこと、さらに人類学などとの学際的な観点を取り入れ、行為の機能上の問題とも関連させ文化の構成要素の分析を行ったことである。そこには、20世紀後半以降の社会状況の変化の中でも適用可能な理論的有効性を見て取ることができる。

20世紀後半から21世紀にかけて、人類社会は目覚ましい変貌を遂げてきた。社会という概念の暗黙の前提とされてきた国民国家 (近代国家) を基盤とする全体社会の統合力が、グローバル化 (globalization) 現象のもとで減退し、特定社会と相即的に想定されていた文化の基盤が問い直されるようになった。与件とされていた文化自体が形成される過程やその形成主体に対しても分析の焦点があてられるようになる。さらに電子メディアの発達により、デジタル符号による記号化が一層進展、深化し、実在から離れた記号の自律的展開という現象がみられ、具体的な社会から遊離した (脱領土化した) 文化が現出してくる。このような状況下で、社会学における「文化的転回 (cultural turn)」の必要性が唱えられ、人間的事象における新たな角度からの「文化的なもの」の説明力が再認識されつつある。

本論文の主たる目的は、社会学における分析用具として開発されてきた文化概念を再吟味することによって、現代のグローバル化状況における文化を分析するためのその有効性を探究すること、延いては、ディシプリン (discipline) としての社会学の継続性を確認することにある。そのために、論理展開の手がかりとして、伝統的な社会学の理論構成過程で彫琢されてきたT. パーソンズの社会学理論における文化概念の検討を中核に据えて考察していく。

本論の全体構成は二つの部分に大別される。前半部である第一部 (I章～IV章) では、1950年代当時形成された社会学における文化の概念および分析図式について、主にパーソンズの社会学理論を取り上げて検討する。ここで扱う文化概念は、近代の国民国家を母体とした国民社会が、相対的に自足的かつ包括的な単位とされていた状況下で生成されてきたものである。第二部 (V章～VIII章) ではまず、20世紀後半から21世紀にかけて顕在化してきたグローバル化現象の実態とその本質の解明を試みる。とくに、電子的 (electronic) な情報技術の発達が人類の文化に大きな影響を与えたこと、つまり電子メディアを介した記号操作による模擬体験 (simulation) が精緻化して実在界から遊離した現実 (hyper-reality) の比重が増したことが指摘される。次いで、グローバル化に伴うこのような人間の状況の変化に対応して、従来の文化概念および文化理論の再構成について検討し、文化のグローバル化という現象と「グローバル文化」を分析する可能性について考察する。

第一部、第二部のそれぞれを構成する各章の概要は以下の通りである。

I章では、ウェーバー的な意味の問題への解答、およびデュルケムの集合意識との関連でのシンボリズム論の継承、という点からパーソンズの文化概念をとらえなおす。ここでは記号論と文化概念との関連性、さらに行為過程における文化の機能について検討する。II章では、人類学における先行研究を踏まえた文化内容の分析、つまり文化の構成要素の設定方法についてみてゆく。パーソンズの50年代の行為理論においては、文化は行為状況下の機能上の問題に対応して、三つの要素に分類される。これにもとづき、III章では、文化の三要素 (認知的、表出的、評価的) の特質と相互関連性の解明を試みる。そしてIV章に

においては、50年代当時の文化研究の総括とも言うべき米国での「ハーバード価値プロジェクト」をとりあげ、その理論的背景と実証研究の方法について概観する。このプロジェクトは、文化における評価的要素（価値）による集合体の統合という、当時の人文・社会科学におけるひとつの共通理解に立脚してなされた比較文化の学際的な共同研究である。

本稿後段の第二部では、グローバル化による社会の変容と、第一部で検討した社会学における文化理論の再構成の問題を扱う。V章では、まず、50年代の行為理論的組み立てから60年代のシステム論的に再編成されたパーソンズの文化理論（概念図式）を整理し、その再構成を試みる。次いで、社会の変容と新しい文化理論の動向について、カルチュラル・スタディーズと既存の文化理論との比較を通して考察する。VI章では、グローバル化現象一般とそれに伴う社会理論の形成および分析視点について概観し、VII章ではそのうち文化次元のグローバル化について考察する。ここでは、電子的な情報テクノロジーの発達、つまり電子メディアの普及による記号の自律的な展開とその結果比重を増してきた「ハイパー現実」について言及する。VII章2節においては、英国のTCSセンターの「新百科全書プロジェクト」を取り上げ、電子メディアの普及というデジタル化に伴う現代の知識形態（文化）の本質解明を試みる。VIII章においては、これまで検討してきた社会学における文化分析の図式を前提に、文化のグローバル化という現象をいかに把握するかについて検討する。文化を包括的な全体として扱うのではなく、文化要素のそれぞれの記号特性に立脚してグローバル化による文化変容を捉えることにより、既存の文化内部で要素間の不均衡が増大していることが指摘される。さらに、文化がグローバル化するなかで脱領域化し特定要素が肥大化した「グローバル文化」の本質について、G. リッツアの「無のグローバル化」概念やJ. ボードリヤールのシミュラクルの概念等を手がかりとして分析する。

パーソンズ理論を修正した文化の分析枠組みのもとで、本稿の全体を通じた結論として以下の仮説が想定される。つまり、グローバル化状況下で、一つの文化システム内の文化諸要素間で不均衡な発展状態が生ずる、という仮説である。それは、グローバル化しやすく世界規模で再編される要素とグローバル化しにくくローカルな状態に留まりやすい要素との間で生ずる不均衡である。一方、グローバルなレベルで、記号独自の自律的展開のもとに創出され、絶えず再生産、再統合を繰り返す「グローバル文化」は、特定の記号領域において形成される文化要素（認知的、表出的）が特化した文化と言えるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、IT革命以後のグローバリゼーションの社会過程を分析するのにふさわしい文化の社会学理論を構築することをめざした野心作である。議論の出発点をなすのはタルコット・パーソンズの文化論である。丸山は、パーソンズの議論のポイントとして、文化をシンボル性記号のシステムと定義し、文化システムと社会システムを概念上区別しつつ、両者の相互関係を分析した点に求める。こうした解釈は文化システムの中核に「価値システム」を見いだす従来のパーソンズ理解の盲点を突くものである。

パーソンズの文化概念のこうした力点の移動に伴い、二つの理論的可能性が開かれた。まず第

一に、1970年代以降のいわゆる「記号論的転換」後の文化理論の成果が、パーソンズのシステム論の中に全面的に取り入れられ、インターネットと消費文化に駆動されたグローバリゼーションの一局面を適切に扱うことの出来る分析枠組みとして再生された。第二に、パーソンズ自身は理論上の位置を示しながらも、立ち入って分析することが出来なかった「表出的シンボリズム」に関して、認知的および評価的な文化システムと同等な扱いをすることが可能となる。

丸山の理論研究は、テキストの解釈をし直す作業とともに、1960年代の「ハーバード価値プロジェクト」および1980年代以降展開されている「新百科全書プロジェクト」に、自ら参加して行った研究実践を素材とし、セオリービルディングに関する経験的研究になり得ている。こうした独創的な論点を含む本論文は、博士（人間科学）の学位にふさわしいと判定される。